

つまずき研究の展望

葦原 摩耶子

スポーツの実施は、心身の健康を維持・促進し、課題に挑戦することによって自己実現をもたらし、生涯に渡る楽しみや生きがいになるなど、私たちに多くの恩恵を与えてくれる。その反面、スポーツ活動の中で、技能が上達しなくなったり、やる気が持続せず競技からドロップアウトしてしまったり、学業と運動部活動の両立に悩んだり「うまくいかない経験」を有する者は多い。このようなスポーツ場面におけるうまく行かない経験を「つまずき」と総称し、スポーツ活動に従事する学生の支援や指導者の養成に役立てることを目的とした研究が、ジュニアスポーツ教育学科の教員を中心に始まっている。

「つまずき」研究の大きな特徴は、これまで個別に検討されてきた事象を包括的に見直し、その支援方法を考えようとしている点である。従来は、技能の伸び悩みはスランプとして、競技継続に関わる意欲の問題はモチベーションや燃え尽き

症候群として、スポーツ選手が抱える種々の悩みは競技ストレスとして研究がなされてきた。しかし、実際にスポーツ活動をしている学生の悩みを聴いていると、相談のきっかけになった問題の裏にその他の問題を同時に抱えており、複雑な様相を呈していることが多い(図1)。例えば、部活動に対する悩みを訴えてきたケースで、克服すべき課題がスポーツ環境の中だけでなく、本人の精神的な成熟の程度や家族との関係とも絡み合っており、結果としてスポーツ活動からの離脱だけでなく大学生活そのものへの不適応を引き起こすなどである。このようなケースの場合、影響は部活動場面に留まらないため、部活動指導者だけでは対処不可能である。逆に、専門家による支援の際にも、スポーツ場面の特性やアスリート特有の背景への理解が乏しければ適切な対処ができないだろう。したがって、スポーツ場面における「つまずき」を理解し、学生を支援していくためには、幅

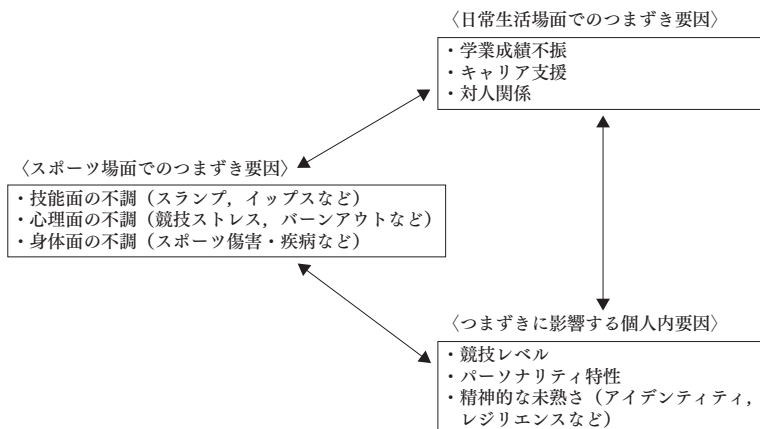


図1. 想定されるアスリートを取り巻くつまずきとその関連要因

広い視点から行われた研究を統合し、総合的にアプローチしていくことが有効と考えられ、多分野の研究者による学際的な研究が必要であるといえる。

このような背景から「つまずき」研究は、神戸親和女子大学学習教育総合センターにおいて、「学内の共同研究環境の活性化」に関する研究チームの取り組みとして採用されている。現在、ジュニアスポーツ教育学科のスポーツ心理学を専門とする教員2名を中心に研究が開始され、「スランプ対処・予防のためのスランプエピソードの分析」と「既に習得した技能が新しい運動技能習得に及ぼす影響」の2つの視点から検証が進められている。まずはこの2課題を足がかりに新しい視点で「つまずき」を捉える意義を示し、学生アスリートを取り巻く諸課題を整理するとともに、今後は学科を問わず複数の専門性を持つ教員がチームを組み支援するための枠組み作りに発展させることが望まれる。そして、大学教員の研究成果が学生の教育、および課外活動に還元されることによって、充実した学生生活を支えるだけでなく、次世代のスポーツ指導者の育成につながっていくことが期待される。